

幼稚園における心を育む教育のパラダイムと実践の変遷

キーワード：心を育む教育，幼稚園じほう，初等教育資料，幼稚園教育課程研究指定校，テキスト分析。

田中 亨胤*・三宅 茂夫**
(平成12年9月20日受理)

1 問題の所在と目的

青少年が関係する事件が日常化し，事態は一層悪化に向かっているようにも感じられる。さまざまな青少年を取り巻く問題に対し，家庭，学校，地域，行政は一体となり事態の収拾を図ろうとしているが，その成果は未だにみえてこないのが現状であろう。

このような状況に至った原因については，いろいろと言われている。状況の深刻さや問題の性質から，特効薬的な方策などは望みようもないのではないかと思われる。混沌とした状況の中で，問題解決の糸口をみつけ出すためには，これまで社会性，道徳性の培いなどにおけるさまざまな心を育てる教育に対し，どのような取り組みがなされてきたのかを明らかにする必要があると思われる。厳しい言い方をすれば，「なぜ，これまでの豊かな心を育てる教育への取り組みが無力であったのか」を明らかにすることにより，新たな方策への道筋がみえてくるのではないかと考える。

上述した状況下において，具体的な方策を求めることは至難の業であるが，本研究をはじめとした論者の「幼児の生活世界における心を育むコミュニケーションの生成」に関する一連の研究において，その糸口を明らかにしたいと考えるのである。そこで，研究を大きく次の4つのステージから想定した。第1ステージでは，これまでの幼児教育についての公的な方向からのアプローチにより，問題点の明確化を図る。第2ステージでは，各幼稚園では心の教育をどのように捉え教育課程に位置づけてきたのか，そしてそれらを育てるための実践がどのように行われてきたかを明らかにする。第3ステージでは，必ずしもまだあまり明確化されていない，道徳性の芽生えを育む教育のパラダイムを想定する。そして，第4ステージでは，それまでの成果としてカリキュラム開発を行い，その有効性について検討したい。

第1ステージにあたる本研究では，2つのテキストを用いることにより，それぞれの視点から研究主題にせまることにする。テキストの詳細については後に譲るとし，1つめのテキストは『幼稚園じほう』における「論説」である。このテキストの内容を分析することにより，日本の幼児教育の根幹となるパラダイムの動向について明

らかにする。2つめは『初等教育資料』である。このテキストでは，文部省による「幼稚園教育課程研究指定校」への「研究主題」および各研究指定校における題目，内容等の分析を通して，心を育む教育における実践の変遷を明らかにする。それぞれのテキストは公的な色彩の濃いテキストである。相互の関連性も考えられるので，総合的に考察することにより，これまでの幼児の心を育む教育における問題点について明らかにすることができると思う。

表1 執筆者の所属機関

機 関 名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	総人数			
	国立 大	私立 大	私立 短大	文部省 教育委	専門機	専門学 校	高 中 学 校	小 学 校	養護 校	国 公 立	私 立 他				
A 1	24														
A 2	18														
A 3	12														
A 4	9														
A 5	8														
A 6	5														
他A (33機関)	66											(142)			
B 1		24													
B 2		14													
B 3		13													
B 4		9													
他B (28機関)		40										(100)			
C 1			6												
他C (20機関)			28									(34)			
文部省				51								(51)			
東京都庁					9										
他D (2機関)					4							(13)			
E 1					17										
E 2					9										
E 3					5										
他E (7機関)					8							(39)			
F 1						1						(1)			
G 1							1					(1)			
H 1								5				(5)			
I全 (4機関)									4			(4)			
J全 (3機関)										9		(9)			
K全 (19)											24	(24)			
計	142	100	34	51	13	39	1	1	0	0	5	4	9	24	423

注・執筆回数5回以上の機関のみそれぞれ記載し，5回未満の機関については他，全として合計数を掲載した。

・執筆者の当時の所属機関とした。

・総人数は，一人の執筆者が2回以上執筆している場合もあるため，のべ人数とした

* 兵庫教育大学第1部 (幼年教育講座)

** 兵庫教育大学大学院連合学校教育実践学専攻

2 研究の方法

2・1 研究の方法

本研究は課題の解決として、主に2つのワークから構成される。1つは『幼稚園じほう』における「論説」の分析。2つは『初等教育資料』における文部省幼稚園教育課程指定校への研究主題の分析である。研究の課題となる問題点が、各テキストへ典型的なものとして照射されている。それら进行分析することにより、問題点の背景が明らかになるのではないかと考える。以下にそれぞれの資料の性質、ワークの内容と方法について述べる。

2・1・1 テキスト分析1の要領：『幼稚園じほう』

(1)資料の性質

『幼稚園じほう』は、全国国公立幼稚園長会が発行している。日本の幼稚園教育の牽引的役割を担っていると考えられる国公立幼稚園の関係者に、定期的に配布されるものである。内容も教育等に関する問題や文部省等の動向を非常に敏感に受け止めながら、タイムリーな話題を提供するメディアである。本研究で用いる「論説」の執筆者構成(表1)からも、その性質は裏付けられるのではないと思われる。特に教育に関連する国立大学の教官、文部省に関連のある人たちの執筆が非常に多いことが大きな特徴となっている。したがって、当時の日本の幼稚園の実践を支えていたイデオロギーを、照射するかたちとなっていると考えられる。

また、資料的価値としても高く、発行回数が毎月定期的で、発行部数も大規模で組織的、公的な資料である。したがって、研究という文脈においても資料の信頼性、妥当性などにおいても最適であると思われる。『幼稚園じほう』の「論説」は、平均毎月2篇が掲載されている。本研究では、昭和48年4月号から平成12年度3月号までの総数、425篇を対象とした。なお、昭和48年4月号～平成6年度3月号までは、『幼稚園じほう』の中の、「論説」部分だけで編集された「幼稚園教育大全」を利用した。

(2)内容と方法

『幼稚園じほう』の構成を支える内在的な構成要素の抽出である。方法としては、内容分析(content analysis)を応用した。その際、Krippendorff,K.(1980)、八並光俊(2000)を参考とした。

〈分析手順〉

方法の手順として、次の4つのステップを踏むこととした。

- ① それぞれの「論説」を読み、キーワードをあげる。
- ② 調査者5人がキーワードを提示、検討しながら最終的に5つ以下のキーワードに絞り込む。
- ③ 抽出されたキーワードをたよりに「論説」を分類。
- ④ 特に本研究の主旨を調査者に話し、「幼稚園教育要領」等を参考にしながら、キーワードとなるものをあげ、最終的に10のキーワードに絞り込む。

- ⑤ ②で抽出されたキーワードと④で決定されたキーワードをつき合わせ、教師の実践の面から、幼児の人とかかわり、共に生きる心を育む教育に踏み込んだ内容の「論説」を選び出す。

〈分析者〉

調査は、教職経験15年以上の幼稚園教師4名と研究者1名の計5名によって行った。なお、共同研究者は各行程における結果の調整を行った。このように、分析に多くの幹部クラスの幼稚園教師を用いた理由について、2点のことがあげられる。第1点は、分析の信頼性の観点からである。多人数のため、それぞれの作業の段階でコンセンサスを得るために多くの時間を要したが、信頼性を確保する上で必要であると考えた。第2点は、研究の目的に照らして、『幼稚園じほう』から発信した情報の主な受信者となる幹部クラスの教師に分析してもらうことが、解釈上必要であると考えたからである。

2・1・2 テキスト分析2の要領：『初等教育資料』

(1)資料の性質

文部省は「幼稚園教育課程研究指定校実施要項」を定め、昭和41年度より「幼稚園教育課程研究推進校」を中心に取り組んでいる。その趣旨は、「幼稚園教育の当面する教育課題をとらえ、教育課程および指導方法等の改善のための調査研究を行い、幼稚園教育の充実に資する」とされている。つまり、さまざまな教育課題に対し、実践を前提に調査研究を行い、その方向性を示していくものである。したがって、これらの文部省幼稚園教育課程指定校の研究主題および各研究指定校における題目や内容などを分析することにより、その折々の保育実践における「幼児の心の教育」の扱われ方を明らかにすることができるのではないかと考える。また、指定校や年代により、題目は研究主題のままであったり、指定校が主題を受けながら設定する場合もあった。そうした場合には、特にそれらはその指定校の幼児観、教育観などが反映されていると思われた。なお、表4-1、表4-2の「研究主題の変遷」の作成にあたっては、『初等教育資料』における「幼稚園教育課程研究指定校研究集録」を参考とした。したがって、すべての指定校について集録されているわけではない。

(2)内容と方法

「幼児の心の教育」という視点から、『初等教育資料』における「研究主題」の変遷や、「幼稚園教育課程研究指定校研究集録」にみる指定校の研究内容の傾向を分析した。

3 テキスト分析1の結果：『幼稚園じほう』における「論説」の分析

3・1 分析の経過と内容

(1)分析の経過

先に示した手順にしたがい、『幼稚園じほう』におけ

る「論説」の分析におけるいくつかのステップについて、その途中経過について述べておくこととする。

〈手順2〉 調査者5人によるキーワードの絞り込み

調査者5人の協議において析出されたキーワードについて、多様なものの中で主なものの一部を次にあげることとする。なお、掲載内容は、「題目」「執筆者イニシャル」「掲載年度」「キーワード」の順となっている。

- 1 「個性重視の教育」 T.T., H 6, 個性, 自己教育力, 自己効力感, 保育者のあり方, 長所伸長。
- 2 「生きる力を育てる, 子どもの日常的な現象世界からの検討」 Y.O., H 6, 生きる力, 生きることの尊さ, 人間関係, 子どもの発達モデル, 教育の役割。
- 3 「家庭, 地域との連携のあり方」 M.H., H 4, 週五日制, 学校家庭地域との連携, 2つの連携のパターン, 地域に開かれた幼稚園。
- 4 「幼稚園教育の基本, 環境による教育」 S.K., H 元, 環境による教育, 感情, ゆとり, 教育要領。
- 5 「幼児期における科学性の育成」 Y.K., S 50, 経験による学習, 発達, 科学, 審美的知性の開発。
- 6 「幼児期にとっての心の教育」 H.I., H 3, 精神面の弱さ, 幼児期の自律, 自律性, 社会性, 愛情, 信頼関係, 思いやり, 教師の役割, 幼児期の重要性。
- 7 「ことばを育てる」 J.M., S 62, ことばの発達, 環境によって学習することば, 思考の道具となる知的活動, 相互連関的に発達する諸機能, 活動過程の重視, 環境構成。
- 8 「知的好奇心を育てる」 M.M., S 61, 知性と情意の関係, メタ認知的知識, 意欲が相互交渉の中で促進される, 最近接領域, 認知発達の促進。
- 9 「指導計画と評価について考える, よりよい指導を生み出すために」 M.N., H 2, 指導計画, 評価, 観察, 総合的視点, 分析的視点。
- 10 「幼小の連続性を考える, 幼稚園教育の特質をふまえて」 K.A., S 62, 幼少連携, それぞれの教師の連携, 生活科, 指導の援助。
- 11 「幼稚園教育における『基礎・基本』とは何か」 S.M., S 61, 基礎・基本, 自己教育力, 基本的生活習慣, ミニマム・エッセンシャルズ。
- 12 「地球環境問題を考える」 Y.H., H 6, 地球環境問題, 環境教育, 宇宙船地球号。
- 13 「幼稚園教育と家庭教育の役割について」 K.F., S 59, しつけ, 自立, 育児不安, 家庭教育と幼稚園教育。
- 14 「遊びの学習性・学習の遊び性, 幼児教育の本質はどこに?」 H.O., S 57, 幼稚園は遊び, 小学

校は学習, 急ぎ志向, 早期学習の教育, 遊びと学習。

- 15 「これからの時代に求められる専門性」 Y.T., H 5, 教師の専門性, 過程の重視, 生活経験の不足, カウンセリング・マインド, 集団と共に育つ, コミュニケート。
- 16 「職場のストレス・コントロール」 S.O., H 4, ストレスの強い職責, 燃え尽き症候群, 精神的健康, 過剰適応。
- 17 「研修と専門職, 幼稚園教師と研修」 K.N., S 3, 保育者の専門性, 受け身から能動へ, 研究結果, 保育の隔たり。
- 18 「子どもと社会福祉」 T.I., H 6, 人間社会の構成, 健康な自我, 社会福祉の心, 人間観の形成。
- 19 「『国際化』寸考」 E.I., H 5, アラブ人とユダヤ人, 同質と異質, 国際化と人間化, 母性原理と父性原理, コミュニケーション能力, 人間関係。
- 20 「幼児にふさわしい生活をつくり出すために—幼稚園の施設設備, 園具, 教具を問い直す—」 Y.T., H 7, 施設設備, 園具, 教具, 保育環境。
- 21 「『思いやりの心』を育てる」 Y.O., H 7, 思いやり, 心の知識化, 共感的理解, 教師の役割, 援助, 幼児理解。
- 22 「生活の多様化をプラスにとらえる」 H.H., H 8, 生活の多様化, 異質性, あるがままの自分から, ジェンダー。
- 23 「こどもにとっての『けんか』の意味と友達関係」 M.F., H 8, 喧嘩, 相互交渉, 思いのズレ, 自分の気持ちの表現, 人間関係, コミュニケーション, 信頼関係。
- 24 「少子化時代の保育と子育てネットワーク」 N.O., H 8, 少子化, 遊び, 幼稚園の役割, 子育てネットワーク, 子育て相談。
- 25 「幼稚園教育における情報化」 T.S., H 9, コンピュータ環境, コンピュータの活用による心理的発達, メディアと学び。
- 26 「時代の要請にこたえる幼稚園運営」 O.M., H 1, 学制, 幼稚園, ブランド商品化, お受験, 幼保一元化。
- 27 「幼児期に育てたい道德性」 A.Y., H 11, 幼児期の道德性, 発達を促す経験, しつけ, 他律的道德性, 人間関係, 大人の役割, ルール, 遊び, 集団, 異なる視点, 信頼関係。

〈手順3〉 抽出されたキーワードをたよりに、「論説」を分類。

上記の資料からもわかるように、内容については多岐にわたる。分類する上で、手がかりとなったのは以下に

示すカテゴリーであった。

- ・幼児の発達に関するもの
- ・幼児の社会性や道徳性に関するもの
- ・保育に関するもの
- ・社会の変化に関するもの（高齢化、情報化、少子化、国際化等）
- ・教師の職能形成、研修に関するもの
- ・幼児の生活に関するもの（環境、自然、遊び等）
- ・健康に関するもの

なお、主題として遊びが取り上げられ、部分的にその中で子どもたち同士のかかわりを述べた類の「論説」や心理的な発達における概観的な「論説」等は含めなかった。主観的な観点となるが、現場の教師が読んで実践と結びつけることが考えられるような「論説」の選出を根拠とした。

〈手順4〉「幼稚園教育要領」等を参考に、キーワード化する。

研究の主旨に基づき、「幼稚園教育要領」などにおいて関連する記述を手がかりに、キーワードを抽出した。それらは、「集団」「思いやり」「人とかかわり」「情操」「心」「人間関係」「社会性」「道徳性」であった。

〈手順5〉②で抽出されたキーワードと④で決定されたキーワードをつき合わせ、教師の実践という感覚から、幼児の人とかかわり共に生きる心を育む教育に踏み込んだ内容の「論説」を選んだ。

以上の手順の結果、423「論説」中、68の「論説」が選出された。

(2)分析の結果内容

結果について、詳しく述べておくこととする。なお、平成7年4月号～平成12年3月号の『幼稚園じほう』は分類されていないが、『幼稚園教育大全』では、それぞれの「論説」を7つの項目で分類編集している。したがって、すべての「論説」から言えることではないが、各項目ごとに以上の手順をふみながら選出した「論説」数を表2に示した。傾向として把握できることは、「幼児の発達・幼児理解」の項目で約27%、「幼稚園教育の在り方」14%、「教育計画、幼稚園教育の内容・方法の掲載」約14%であったものの、軒並み10%未満の結果となっている。

幼稚園教育の基本は、次の3点である。1つは、幼児のまわりの人的環境を重視する「環境による教育」である。2つは、幼児が遊びによるさまざまな体験により、主体的に多くのことを学びとっていく上での「遊びを通しての総合的な指導」である。3つは、教師のサポーター的な役割を重視した「教師との関係に支えられた生活」である。これらの事項が、幼稚園教育の基本であるにもかかわらず、表2にみられるように、「環境」以下の4項目の掲載数が少ないことは、意外な結果である。「心を

表2 「幼稚園大全」の項目及び「幼稚園じほう」における「心を育む教育」に関する論説数

項目名	該当論説数	各論説数	占める割合(%)
幼稚園教育の在り方	8	57	14.0
幼児の発達・幼児理解	14	52	26.9
教育計画、幼稚園教育の内容・方法	10	80	12.5
環境	5	58	8.6
遊び	1	16	6.3
教師の資質・役割	1	39	2.6
時代に応じた幼稚園教育の課題	1	15	6.7
「幼稚園じほう」			
平成7年4月号～平成12年3月号	28	106	26.4
合計	68	423	16.1

注・「教育大全」は、編集者の項目に従ったが、平成7年度以降の「幼稚園じほう」は不分類のため別項目として掲載した。

表3-1 各年における「幼稚園じほう」掲載数と主なできごと

年 月	数	主なできごと
平成12年3月	1	
平成11年12月	2	
11月	2	
9月	2	
平成10年11月	1	平成8年度「公・私立高校における中途退学者数等の状況」
7月	2	発表(文部省) ※中退者数は11万1989人。
4月	2	中央教育審議会が「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機」答申。 学校基本調査(速報)(文部省) ※登校拒否(年間30日以上欠席)の児童生徒数は約10万5400人で、過去最高を記録。 幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領を告示(文部省)。
平成9年7月	2	平成7年度「公・私立高校における中途退学者数等の状況」
6月	2	発表(文部省) ※中退者数は9万8179人。
4月	2	学校基本調査(速報)(文部省) ※登校拒否(年間30日以上欠席)の児童生徒数は約9万4000人で、過去最高を記録。
平成8年9月	1	平成6年度「公・私立高校における中途退学者数等の状況」
4月	1	発表(文部省) ※中退者数は9万6401人。
3月	1	児童生徒の問題行動等に関する調査協力者会議が「いじめの問題に関する総合的な取組について」最終報告をまとめる。
平成7年12月	2	平成5年度「公・私立高校における中途退学者数等の状況」
10月	1	発表(文部省) ※中退者数は9万4065人。
9月	1	「いじめ対策緊急会議」最終報告(文部省)
6月	1	※いじめる生徒は出席停止、養護教諭の役割重視。
4月	2	学校基本調査(速報)(文部省)
2月	1	※登校拒否(年間30日以上欠席)の児童生徒数は約7万7000人で、過去最高を記録。
1月	1	
平成6年6月	1	学校基本調査(文部省)
4月	1	※登校拒否(年間30日以上欠席)の児童・生徒約7万5000人。
3月	1	「児童の権利に関する条約」公布・発布 ※「児童の権利に十分に配慮し、一人ひとりを大切にされた教育の充実を図る」よう通知。
平成5年10月	1	学校基本調査(文部省)
5月	1	※登校拒否(年間30日以上欠席)の児童・生徒約7万2000人。
平成4年5月	1	「登校拒否問題について」最終まとめ(学校不応対策調査研究協力者会議)
4月	1	文部省調査(文部省) ※高校中退者約12万3500人。
平成3年6月	2	学校基本調査発表 ※「登校拒否」依然増加、高校進学率95.4%。
平成2年11月	2	新学習指導要領の移行措置スタート
7月	1	※道徳と特別活動の全面実施、「日の丸」「君が代」の義務化
5月	1	
2月	1	

表3-2 各年における「幼稚園じほう」掲載数と主なできごと

年 月	数	主なできごと
平成元年11月 10月	1 1	「幼稚園教育要領」, 小・中・高の「学習指導要領」告示
昭和63年11月 8月 5月	2 1 1	
昭和62年 2月	1	教育改革に関する第3次答申(最終答申)(臨教審) 「幼稚園, 小学校, 中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」答申(教課審) ※調和のとれた発達, 生涯学習, 個性を生かす教育, 国際理解
昭和61年 7月 5月	2 1	教育改革に関する第2次答申(臨教審) ※21世紀のための教育目標(生涯学習体系への移行)
昭和60年 7月 6月	1 1	「いじめ問題の対応策について」提言(児童生徒の問題に関する検討会議) ※いじめの問題に関する指導徹底を通知(文部省) 「児童生徒の問題行動に関する検討会議」発足(文部省) 教育改革に関する第1次答申(臨教審) ※個性重視による選択機会の拡大, 徳育重視, 学歴社会の是正
昭和59年11月 1月	1 1	「生徒の健全育成をめぐる諸問題—登校拒否問題を中心に—指導手引書配布(文部省) ※みだれなどの問題 「荒れる教室」対策に教員重点配置を決定(文部省)
昭和58年 9月	1	「荒れる教室」実態調査(文部省) ※7校に1校が荒れる中学校。
昭和57年12月 6月	1 1	校内暴力への具体的な手引書を配布(文部省)
昭和56年 6月 4月	1 1	「生涯教育について」答申(中教審) 「校内暴力の事件の事例集」作成・配布
昭和55年 9月	1	「児童生徒の非行防止について」通達(文部省) ※校内暴力多発のため。
昭和52年12月	1	少年の自殺調査結果発表(警察庁) ※学業問題での自殺増加。
昭和51年	0	「教育課程の基準の改善について」答申(中教審) ※ゆとりある充実した学校生活の実現を目指す。
昭和50年 6月	1	
昭和49年 10月 2月	1 1	「教育・学術・文化における国際交流について」答申(中教審)

注・昭和39年より続いた幼稚園教育要領が大幅に改訂になった平成元年4月との間を点線で示した。

- この表は、「幼稚園大全」の論説数の結果と江川玟成他編(1999)「最新教育キーワード137」[第8版]他を参照に作成した。
- ※は、関連する事項を記載した。

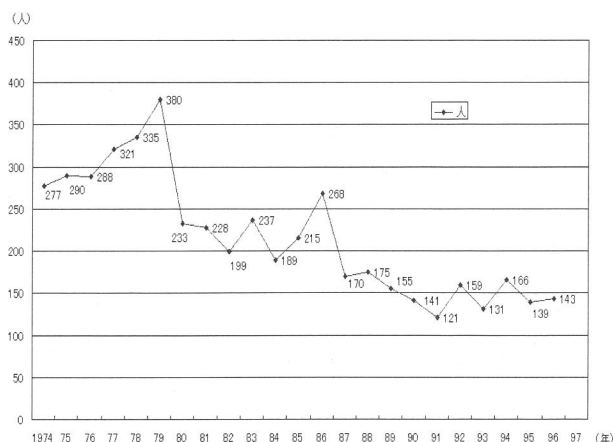


図1 児童・生徒の自殺の状況(1974年~97年)

育む教育」に関する論説数が、平成元年の「幼稚園教育要領」の改訂前後では、改訂前の15年間で22篇, 改訂後6年間で18篇と、取り上げられる機会が増えてきた。しかし、「心を育む教育」は、全体的には13%のとりあげ率になっており、この内容に関する注目度は、疑問視せざるを得ない。

次に表2, 3, 図1~3から把握されたことは、教育における問題が深刻化し、社会問題化し始めたのがいつの時期からかをはっきりと区分することはできない。しかしながら、この『幼稚園じほう』(『幼稚園教育大全』の元となった冊子)が発刊されて以降、昭和51年(1976)頃より増加に転じた子どもの自殺の問題(図1)や昭和50年(1975)よりコンスタントな増加を示している不登校(登校拒否)の問題(図2), 平成5年(1993)より急増したいじめ問題(図3)など、その種類と問題の深刻さは顕著となった。しかしながら、年間概ね掲載される「論説」総数が24篇とすると、平成7年の9篇は例外として、該当する「論説」の数は例年0~6篇と少ない。

3・2 テキスト分析1: 結果の考察

(1)子どもを取り巻く現実生活との不連動

集団における人とのかかわり合いを通して積極的に幼児の心を育むことに関しては、あまり重視されてこなかったことがわかるのではないかと。「心の教育」に関する「論説」の数も「幼稚園教育要領」改訂を契機に増加はしているが、年々増加するさまざまな学校における「自殺」「校内暴力」「登校拒否」などの問題や、それに関する答申等にはあまり連動されてないようである。昭和51年(1976)より昭和54年(1979)までの間、急激に児童・生徒の自殺が増加した。自らの命を尊ぶことを育むことが教育の基本である。問題状況の対応に対しては、さまざまな角度からいろいろな取り組みがなされた。また、昭和50年(1975)よりコンスタントな増加を示している不登校(登校拒否)の問題や、平成5年(1993)

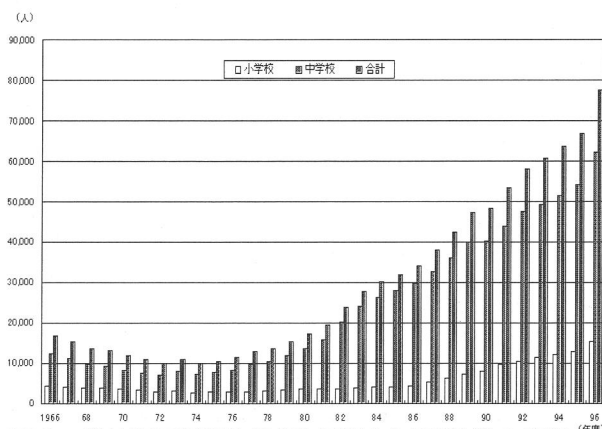
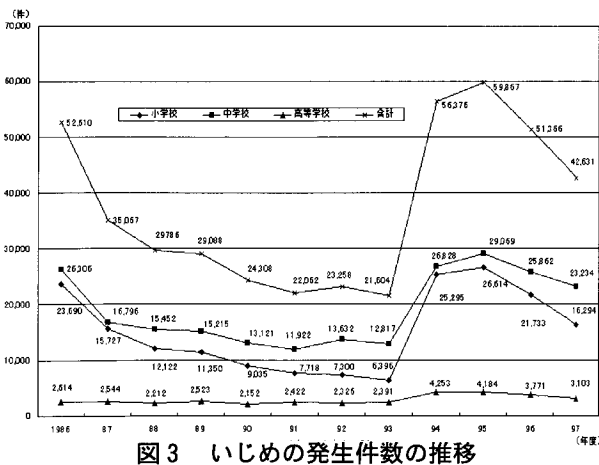


図2 登校拒否児童生徒(50日以上欠席者)数の推移



注・図1～図3は、文部省『データにみる生徒指導（平成8年版）』を参考に作成した。

より急増したいじめ問題など、いずれの問題も複合的に重なり合う。その問題の深刻さは国民的な社会問題となり、悪い流れをそのまま引きずる恰好で今日に至っている。なかなか望ましい結果を出すことは難しいが、文部省や教育現場では生徒指導をはじめとして多くの取り組みがみられる。しかしながら、積極的な小学校以降の現場における取り組みと比べ、その対象とする子どもの特性を考慮に入れても、なお幼児教育の現場との温度差には疑問の残るところである。このように、幼児教育が楽観的立場をとり続けてきたこと、そうした教育問題に対して積極的に方策を提示されなかったことからしても、あらためて現状の認識を深め、問題状況への対応がなされるべきではなからうか。

(2) 客体とされる幼児

心に関する問題を間接的に述べている「論説」の内容について、多くの場合、幼児の主体性を大切にすべきであるとしている。しかし、取り巻く大人や教師が、人とかかわり方や社会的な規範などの社会性について、幼児に一方的に伝え教える必要性を論じたものも少なからずみられる。また、遊びの中で多くの人やものと関わることで、やがて社会性も身についていこうといった漠然とした楽観論も多い。記載された時期が古いものもあるが、当時が現在に比べ、問題がそれほど楽観できる状況であったとも思えない。現在がどうにもならない切迫した状況にあることは明らかである。大人のノスタルジックな考えや、拡大化し過ぎる幼稚園教育の聖域観について、今一度考え直す必要があるのではないか。

(3) 幼児と教師の関係性

幼児と教師の関係においても問題点が把握される。「論説」の中では幼児の特性がさまざまに述べられている。しかし、客体として幼児の存在を捉え過ぎている傾向がある。幼稚園教育の基本として、幼児主体の生活は

基盤となすべき事項である。それにもかかわらず、実際には主体としての幼児の生活は保障されていないようである。幼児は自ら何もできない、依存的なばかりの存在ではないのである。幼児と言えども自らかかわり合い、時には互いの関係にあって、トラブルも当然起こるのである。そうした時に、幼児が自らどのように解決していくのが大切となるのではなからうか。逆に幼児の特性から、可能となる方策も考えられるのである。例えば、幼児期にみられる「アニミズム」のような感じ方によって、相互に了解を成立させることができるのではなからうか。しかし、それは幼児を主体的存在として教師が認識することによって初めて成立し、教師、幼児それぞれが互いに育ちあう教育という行為において、初めて成立するのではなからうか。幼稚園教育に限らないが、教育において子どもが客体として扱われることは、長年の懸案と思われる。そうした教育行為について、渡邊(1999)は Wittgenstein, L. を引用しながら、「意図は慣習を構成する規則の上のみ成り立つのである。規則は私的に従うことはできないから、規則の遂行は主体的行為というよりむしろ共同行為であり、主体性は共同行為の所産と考えることができる。したがって、教育は相互主体的な行為である」と述べている。つまり、教師－幼児、幼児－幼児それぞれの関係が教育という行為の中で重要であるとすれば、それぞれの関係は相互に主体的関係であり、それを達成するために Habermas, J. (1981) の言う了解的なコミュニケーションが、大きな役割を果たすのではないかと思われるのである。

(4) 現在の子ども像と学校の存在の危機

現実に子どもたちにとって、学校がどのようなものになっているのかについて述べておくこととする。1997年8月の文部大臣諮問「幼児期からの教育の在り方について」において、今日の子ども像を次のように言及している。良い点として2つのことをあげている。1つは、健康で活発に育ち、柔軟で豊かな感性や国際性を備えていること。2つは、社会貢献への意欲や正義感や優しさを持っている。次に、憂慮する点として2点をあげている。1つは、社会性や自己責任といった観念の成長が不十分で、社会において許されない行為は、自らについても許されないといった認識が身につけていないこと。2つは、他者に対する温かい思いやりや、望ましい人間関係を構築することが難しくなっていることがあげられている。これらからは、それぞれが不整合な子ども像であるという印象を受ける。良い点は、学校文化に受け入れられる価値志向的なこと、憂慮する点は、直接的には学校文化によって評価されにくいことともとらえられるのである。そうしたところに、今日の学校を取り巻く問題の原因のひとつがあるのかもしれない。生活世界の中で、さまざまな経験をすることにより、それらを生きる力の

糧にすることの困難さがそうさせているのかもしれない。それらについて、渡邊は、「自然体験、社会体験の不足が子どもたちの健全な成長を阻む」としており、そのような状態をもたらしたのは、「学校による家庭や地域社会の植民地化」「学校による生活世界の支配の帰結」²⁾としている。

4 テキスト分析2の結果：『初等教育資料』における「文部省研究主題」と研究指定校の「研究題目」等の分析

4・1 「文部省研究主題」の分析

4・1・1 分析の内容

次に、「文部省研究主題」と研究指定校の「研究題目」等の分析を基に、心を育てる教育についてどのような文部省の方針により、どのような取り組みがなされてきたのかについて明らかにしていきたい。

文部省は、昭和41年度より幼稚園の教育課程の改善の充実に資するために「幼稚園教育課程研究指定校」を設置し、教育課程や指導計画等のあり方について研究を推進してきた。そして、今日までさまざまな研究主題を定め研究を行ってきた。表4-1、4-2は、昭和45年度より平成12年度までの研究主題の変遷についてまとめたものである。分類の項目は平成11年版「幼稚園教育要領解説」を参考に、以下の大項目～小項目を設定した。以下にそれぞれのつながりと、分類する上で指標とした事項について簡単にまとめておくこととする。

(1) 「幼稚園教育の基本」

幼稚園教育の基本的な考え方や幼児の特性、教師の役割などに関するもの。

(2) 「教育課程の編成」

教育課程の編成の方法などに関するもの。教育週数や時間数なども含まれる。

(3) 「指導計画」

「指導計画の考え方」

指導計画作成上の考え方に関するもの。

「一般的な留意事項」

指導計画作成上の詳細な留意事項に関するもの。

「特に留意する事項」

指導計画作成上の、例えば障害児や外国人子女、問題を有する特に配慮を要する場合の指導についての詳細な留意事項に関するもの。

(4) 「ねらい及び内容」

「ねらい及び内容の考え方と領域の編成」

各領域のとらえ方と編成に関するもの。

「環境の構成と保育の展開」

活動を各領域の視点から見通した環境の構

成と保育の実際に関するもの。

「各領域に示す事項」

「健康」

心身の健康に関するもの。6領域構成に基づく「幼稚園教育要領」の「健康」の領域に関するもの。

「人間関係」

人とのかかわりに関するもの。6領域構成に基づく「幼稚園教育要領」の「社会」に関するもの。

「言葉」

言葉の獲得に関するもの。6領域構成に基づく「幼稚園教育要領」の「言語」の領域に関するもの。

「環境」

身近な環境とのかかわりに関するもの。6領域構成に基づく「幼稚園教育要領」の「自然」領域に関するもの。

「表現」

感性と表現に関するもの。6領域構成に基づく「幼稚園教育要領」の「音楽リズム」、「絵画製作」の領域に関するもの。

(5) 「その他」－ その他。

表4-1、4-2に示す、「文部省研究主題」の変遷は、これまで研究主題の内容から大きく4つの期に分けることができる。それぞれの期とともに、重視されている事項について以下にまとめる。

○第1期 昭和45年度～55年度

第1期では、「指導計画」や「ねらい及び内容」のそれぞれの「各領域に示す事項」についての各領域にまんべんなく研究主題が網羅されている。

○第2期 昭和56年度～58年度

第2期では、「教育課程の編成」や「指導計画」、「各領域に示す事項」における「環境」、「言葉」に関する領域に集中している。

○第3期 昭和58年度～61年度

第3期では、「教育課程の編成」や「指導計画」が主に主題として取り組まれた。

○第4期 昭和62年度～平成12年度

第4期では、「教育課程の編成」や「各領域に示す事項」における「環境」「人間関係」に関する領域に集中している。

4・1・2 考察

上記の結果にかかわる背景について、それぞれの期ごとに考察することにする。

表 4-1 研究主題の変遷

研究指定年度	主 題 番 号	幼 稚 園 基 礎 教 育 本 成	教 育 課 程 の 成 成	指 導 計 画		ね ら い 及 び 内 容						そ の 他												
				指 導 計 画 の 考 え 方	一 般 的 な 留 意 事 項	特 に 留 意 す る 事 項	考 え 方 と 領 域 の 編 成	保 育 の 展 開	環 境 の 構 成	各 領 域 に 示 す 事 項	健 康		表 現	言 葉	環 境	人 間 関 係								
昭和45年度 ～ 49年度	1			●																				
	2			●																				
	3			●																				
	4																							
	5																							
	6																							
	7																							
	8																							
	9																							
	10																							
	11																							
昭和50年度 ～ 54年度	1																							
	2																							
	3																							
	4																							
	5																							
	6																							
	7																							
	8																							
	9																							
	10																							
昭和53年度 ～ 55年度	1																							
	2																							
	3																							
	4																							
	5																							
昭和56年度 ～ 58年度	1(1)			●																				
	1(2)			●																				
	1(3)			●																				
	1(4)			●																				
	1(5)			●																				
2(1)																								
2(2)																								
2(3)																								
2(4)																								
2(5)																								

注・研究指定年度は、開始時期と終了時期が重なるものもある。

〈第1期〉

文部省は、昭和41年度に幼稚園でも各義務諸学校なみに「幼稚園教育課程研究指定校」を設置し、教育課程や指導計画等のあり方について取り組みをはじめた。幼稚園の在り方をはじめ、「教育課程」や実際の指導に至るまでの研究である。その研究の対象は、あらゆる事項を網羅したものになっている。「一年保育の特質を生かした指導計画」や「数量に関する興味や関心」、「自然に親しむ態度を養う」、「指導の過程や成果については、たえず反省評価を適切に行い」、「リズムカルな集団遊び」などの文言が研究課題の幅の広さを表している。研究指定校においては、これらに対応した題目を掲げ研究を実践した。

〈第2期〉

研究主題が偏りながらも、それらが非常に細分化され

表 4-2 研究主題の変遷

研究指定年度	主 題 番 号	幼 稚 園 基 礎 教 育 本 成	教 育 課 程 の 成 成	指 導 計 画		ね ら い 及 び 内 容						そ の 他											
				指 導 計 画 の 考 え 方	一 般 的 な 留 意 事 項	特 に 留 意 す る 事 項	考 え 方 と 領 域 の 編 成	保 育 の 展 開	環 境 の 構 成	各 領 域 に 示 す 事 項	健 康		表 現	言 葉	環 境	人 間 関 係							
昭和58年度 ～ 59年度	3(1)																						
	3(2)																						
	3(3)																						
	3(4)																						
	3(5)																						
	3(6)																						
	3(7)																						
昭和59年度 ～ 60年度	1																						
	2																						
	3																						
昭和60年度 ～ 61年度	1																						
	2																						
	3																						
昭和61年度 ～ 62年度	1																						
	2																						
	3																						
平成2年度 ～ 10年度	1(1)																						
	1(2)																						
	1(3)																						
	1(4)																						
	1(5)																						
	1(1)																						
	1(2)																						
	1(3)																						
	2																						
	平成10年度 ～ 12年度	1																					
2(1)																							
2(2)																							

注・主題番号は、「文部省研究主題」に準じている。

主題化された特徴がある。第1期の取り組みに加え、一層内容に踏み込んだものになっている。「心身に障害のある幼児」や「学級内において特に指導上の配慮を要する幼児」、「個人差に応じた適切な指導」、「幼稚園や地域の実態・実情に即応した適切な教育課程」についての取り組みがなされている。しかし、領域の分野も「環境」、「言葉」への偏重が昭和52年度からはじまり、今日に至っている。「環境」の中身は主に「数量」であり、「言葉」は「文字」と表現されている。したがって、これらの背景として考えられるのは、幼児期からの小学校での主要教科への前準備が考えられ、幼小連携の流れとも合流し一層その根拠としての可能性が高いと思われる。また、社会の要請から3年保育の需要が徐々に増え始め、3年教育課程編成が求められた関係上、今日まで引き続き研究主題とされている。

〈第3期〉

「教育課程の編成」と「指導計画」が主題の中心となっている。内容は、「3年保育の教育課程」「家庭教育との連携」が中心である。中でも、「教育時間」「教育日数」などの取り組みは、間近に迫る平成元年の「幼稚園教育要領」改訂に備えたものであったと考えられる。

〈第4期〉

「幼稚園教育要領」が改訂された当初（平成2～7年度）は現場も混乱し、すべてを網羅した研究主題が打ち立てられた。しかし、その後は「教育課程の編成」や、「各領域に示す事項」における「環境」「人間関係」に関する領域に集中している。「人間関係」の領域に関する主題は昭和62年にはじめて用いられ、今日に及んでいる。これは遅ればせながら、昭和60年の「教育改革に関する第1次答申」（臨教審）の影響によるものと考えられる。ちなみにこの答申の概要は、個性重視による選択機会の拡大、徳育の重視、学歴社会に是正などである。3年保育の増加による「教育課程の編成」への取り組みや、「数量」に代表される「環境」領域への取り組みは相変わらず多い。

4・2 研究指定校の「研究題目」等の分析

4・2・1 分析の内容

研究への取り組みの中で各研究指定校において、どのように「心」をとらえ、そして、どのような「心の教育」が実践されてきたのかを、研究指定校の「研究題目」「副題目」「内容」において顕著に現れたものから折出してみることにする。

昭和48～49年度（N幼稚園）

◇数量に関する興味や関心および能力がどのように発達するかの研究

◆同上

◎「幼児教育というとはやはり情緒と社会性の発達を中心に考え、知性の開発が不当に外されている。幼児の思考する態度や集中する態度を養うことにより、新しくもの考え出す創造性を伸ばすと共に、生活習慣の形成や社会性の発達にまで役立つよう指導する必要があるのではないかと思う。」

昭和56～57年度（K幼稚園）

◇幼児の発達特性をとらえ、幼稚園や地域の実態・実情に即応した適切な教育課程の編成や実施に当たり、どのような配慮が必要か

◆同上

－幼児の発達特性をとらえた経験活動の選択配列について－

◎「豊かな人間性の育成に欠かすことのできない創造的な思考力は、記憶的なイメージと、創造的なイメージを、自由自在に構成したり、組み替えた

りして目標に向かって構造化していくことによって得られると思われる。」

昭和56～57年度（S幼稚園）

◇幼児一人一人を理解し、個人差に応じた適切な指導を行うためには、どのような配慮や工夫が必要か

◆幼児一人一人を理解し、個人差に応じた適切な指導を行うためには、学級全体の指導と個人指導についてどのような配慮や工夫が必要か

－土と水と太陽に親しむ子供をめざして－

◎「幼児同士が育ち合うようにするには、教師が一人一人の幼児をよく理解するとともに長い目で幼児同士のかかわりを見守ったり、場に応じて指導したりする必要がある。」

昭和63、平成元年度（M幼稚園）

◇人とのかかわりをもつ力を育てる指導について

－幼稚園生活の中で人とのかかわりをもつ力を育てるための適切な指導はどのように行ったらよいか。人間関係を確立していく過程と環境や活動との関連等について研究する－

◆友達とのかかわりをもつ力を育てる指導

◎「友達とのかかわりをもつ力を、友達とのかかわりをもとうとする心の働き、およびあらわれ（行動）をとらえた。つまり、友達を意識したり、求めたり、受け入れたり、対立したりしつつ生活する中で、自己主張と自己制御という心の機能をコントロールして培われる。相手とよりよくかかわっていく心と姿である。」

平成2、3年度（YF幼稚園）

◇人とのかかわりをもつ力を育てる指導について

－幼稚園生活の中で人とのかかわりをもつ力を育てるための適切な指導はどのように行ったらよいか。人間関係を確立していく過程と環境や活動との関連等について研究する－

◆人とのかかわりをもつ力を育てる指導について

－U男の3年間を通して－

◎「幼稚園の生活における子供の人間関係を、環境や活動と共にとらえ、人とのかかわりを持つ力という視点で考察し、その育ちの過程と指導のあり方を考える。」

平成5～7年度（NB幼稚園）

◇発達の諸側面と教育課程編成との関連について

幼稚園教育の基本をふまえ、幼児の生活に即して適切な教育課程を編成し実施するためには、発達の諸側面の育ちをどのようにとらえ、どのように位置付ければよいか

(2)人とかかわる力に関する側面について

- ◆発達の諸側面と教育課程編成との関連について
 - 一人とかかわる力に関する側面についてー
 - 友達とあそべる子どもをめざして
 - ー幼児の内面理解の手がかりと援助の在り方を探るー

◎「幼児と向き合っているときは、教師と幼児の関係と、幼児と幼児の関係を中心に幼児の内面を理解する努力を繰り返し、瞬間、瞬間の教師の援助の在り方をより確かなものにする。」

平成9、10年度（KF幼稚園）

- ◇発達の諸側面と教育課程編成との関連について
 - 幼稚園教育の基本をふまえ、幼児の生活に即して適切な教育課程を編成し実施するためには、発達の諸側面の育ちをどのようにとらえ、どのように位置付ければよいのか

(3)道徳性の芽生えを培う観点から

- ◆発達の諸側面と教育課程編成との関連について
 - ー道徳性の芽生えを培う観点からー
 - 人間らしくよりよく生きるための道徳性の芽生えを培う指導
 - ー葛藤や挫折を通してー

◎「教師も楽しいとか喜んでということには敏感であるが、葛藤や挫折の場面は少なくしたり問題視しないようにしたりして安易に処理しようとする傾向がある。」

「自己責任をとるということは幼児期にぜひ育てておきたい内容だと考える。」

注・◇：文部省の研究指定における研究主題

◆：研究指定校における研究題目

◎：「心の教育」における研究指定校のパラダイムを象徴的に表現している箇所を『初等教育資料』の「幼稚園教育課程研究指定校研究集録」より抜粋

4・2・2 考察

分析から明らかになった2つのことについて、考察を加えることとする。

(1)「心」の捉え方のパラダイムの変遷

「心の教育」に関するパラダイムが、時期によって異なっている。このパラダイムは、上記の分析の◎から把握されるが、幼児観や保育観に根ざしていると思われる。「幼児教育というとはやはり情緒と社会性の発達を中心に考え、知性の開発が不当に外されている」（昭和48年度、N幼稚園）といった記述は、かつての幼児学校論争の典型的なパラダイムの名残であると考えられる。また、昭和56年度のK幼稚園の場合のように、「豊かな人間性」という中に「創造性」、「個性」、「情操性」、「社会性」などの人間性を支えると思われる概念要素が組み込まれて

いる。また、「教師が一人一人の幼児をよく理解するとともに、長い目で幼児同士のかかわりを見守ったり」（昭和56年度、S幼稚園）といった記述からは、幼児は「土と水と太陽」の元で自然に育っていくような保育観が主流であったようにも思われる。しかしながら、問題は、次第に幼児が自然に育っていくには難しくなってきた社会環境や生活環境の悪化にあった。そのため、昭和62年以降、「人とかかわり」や「心の教育」に関する研究に力が入られることとなった。それ以降、主題の扱い方は年々踏み込んだ表現に、内容はより実際的な場面を想定したものに変換された。

(2)より明確化された「心の教育」の研究実践へのパラダイムの変遷

「心の教育」に関する研究主題は、一層明確化され昭和62年度より今日まで引き続き設定されているが、取り扱いは次のように変遷している。

〈「心の教育」に関する研究主題の変遷〉

昭和62年度～ 「人とかかわりをもつ力を育てる指導について」

↓

平成2年度～ 「発達の諸側面と教育課程編成との関連について」

幼稚園教育の基本をふまえ、幼児の生活に即して適切な教育課程を編成し実施するためには、発達の諸側面の育ちをどのようにとらえ、どのように位置付ければよいのか。

(2)人とかかわる力に関する側面について

↓

平成8年度～ 「発達の諸側面と教育課程編成との関連について」

幼稚園教育の基本をふまえ、幼児の生活に即して適切な教育課程を編成し実施するためには、発達の諸側面の育ちをどのようにとらえ、どのように位置付ければよいのか。

(3)道徳性の芽生えを培う観点から

明確化された「心の教育」の視点は、昭和62年の「人とかかわりをもつ力を育てる」といった「領域」的な限定的な取り組みの視点から、平成2年度の「発達の諸側面と教育課程編成との関連」に示されるように、むしろ幼児の全体的な発達としての側面として捉えようとする視点に変換されている。しかし、子どもたちの生活状況はこの視点にとどまるものではなく、切実な視点として「道徳性」が求められるようになったのである。「道徳性」は「幼稚園教育要領」の中では使われてはいるが、幼児教育ではなかなか馴染みのないものであった。そこに、問題の深刻さと緊急性が感じられるのであ

る。

5 総合考察と課題

5・1 人とかがわり共に生きる心を育む教育の変遷からみた問題点

『幼稚園じほう』における「論説」や『初等教育資料』における「文部省研究指定校研究主題」「幼稚園教育課程研究指定校研究集録」をそれぞれ分析することにより、幼稚園における「心を育む教育」のパラダイムと実践の変遷と問題点について明らかにしてきた。その結果として、これまでの幼稚園教育の問題点が浮き彫りとなった。ここでは明らかになった2つの問題点を再び整理しながら総合的に考察を加える。

5・1・1 教育諸問題への幼稚園教育の温度差

深刻な教育問題に対して、幼児教育が連動されていないことである。その原因は、まだまだ探っていく必要があると思うが、『幼稚園じほう』に顕著に現れているように、特定の人や機関に偏った体質の変化も望まれよう。例えば、幼小の連携の記事が幾度となく掲載されているにもかかわらず、小学校の教師の「論説」は皆無なのである。大学教官等の理論的なアプローチももちろん必要であるが、実践にかかわる立場の教師たちの声が反映されないということは、現実的な問題の解決の具体策が不透明となり、状況把握の不確かさにもなる。「幼稚園教育要領」（平成元年度）が現場の指導に混乱を来したことなども、その現れかもしれない。また、今日の教育問題に対しての連動のタイム・ラグは「文部省研究指定校研究主題」にも現れている。昭和50年代前半からすでに校内暴力、自殺、いじめ、登校拒否、不登校などが多発し、教育界はあわただしくなったのである。しかし、幼稚園教育の世界では、一般的な発達論や遊び論などによる楽観論により、問題に対処しようとしてきた。文部省もようやく本腰をいれ、特別に手だてを講じる必要を考え、「研究主題」として「道徳性」に取り組むこととしたのである。しかし、それは問題が拡大しはじめて実に20年の歳月がたってからであった。巷では、こうした教育における種々の問題の原因を改訂「幼稚園教育要領」（平成元年）にあるという声も聞かれるようである。したがって、今後の文部科学省の対応に注目が集まることは当然の結果であろう。

5・1・2 「心の教育」をめぐる教育内容の問題

幼児の「心の教育」をめぐる教育内容の問題である。幼児を取り巻く発達理論は、それなりに明らかになっている部分も多いのである。しかし、多くの場合『幼稚園じほう』の「論説」のところでも述べたが、実際の保育の現場でどれくらい有用であるかということである。つまり、「社会の変化」という作用に対してどれくらいの処方を出せるかということである。「社会の変化」は想

像以上に複雑で、難解であるのである。したがって、さし当たっては、最近の「幼稚園教育課程研究指定校研究集録」の研究方法の変化が示すように、事例研究を重視した現場における仮説の構築と検証の繰り返しにより「理論化」していくことが求められるのではないかと思われる。

5・2 今後に期待される「道徳性の芽生えを培う」幼稚園教育

最近になり「道徳性」という研究主題が登場した。「道徳性」がこれまで用いられなかった理由についてはさまざまなことが考えられるが、今日「道徳性」が登場した理由は、緊急の課題である子どもたちの「心の危機」であろう。しかしながら、幼稚園教育における「道徳性」の教育が、幼児の実態をふまえたものとして構築されなければ、やがて「道徳性」が「道徳」に代わり小学校のような取り組みがはじまることも危惧される。そして、結果として、また幼稚園教育は独自の役割で機能することができぬままとなるであろう。今こそ、「道徳性の芽生えを培う観点から」どのような実践をするべきなのかを、早急に模索しなければならぬと考えるのである。その答えは、平成9年度のKF幼稚園の「人間らしくよりよく生きるための道徳性の芽生えを培う指導 一葛藤や挫折を通して一」などのような、これまであまり着目されてこなかった生活の部分に焦点を当てることにより明らかになるのかもしれない。

また、そうした反面でこれまで無条件に保育者たちが受け入れてきた、「環境」「体験」「遊び」などもあらためて検討してみる必要があるのではないかと考えるのである。それらが無条件に前提にすることにより、さまざまな現象の本質をみえにくくする原因となる場合もあるようである。それは社会の変化により、場合によっては幼児にとって好ましくない状況を供することになっていることがあるからである。例えば、幼児を取り巻く人的、物的環境が緊張した状態に変化した時、そのまま「環境バンザイ」とはいえなくなるであろう。したがって、さまざまな事項に対して、常に吟味する教師の眼と感覚が必要になると考えるのである。中でも、心を育てることの媒介となる「環境」に対する検討は、特に「環境を通しての教育」が幼稚園教育の基本である以上、早急になされなければならない課題である。

幼児の自己教育力と環境との相互作用による教育を重視することを唱えた先人たちの時代とは、あまりに生活環境は変化し歪んできたように思える。例えば幼児の生活の基盤となっていた家庭も父親の存在が薄れ、これまでのものとは異なっている。また、家庭や地域は安らぎや育ての協同体ではなくなり、学校ももはや「その使命は終わった」とまで述べられる始末である。今残された道は、「家庭」「地域」「学校」あるいは「社会」などの

基盤となる環境の再構築ではなからうか。

〔附記：本研究を進めるにあたっては、多くの方々や機関の協力を得た。兵庫県立教育研修所，姫路市立網干幼稚園，姫路市立安室幼稚園，兵庫教育大学学校教育学部附属幼稚園には，格別のご配慮をいただいた。とりわけ，それぞれの機関に所属しておられるお世話になった教職員の方々に個人名を記してお礼を申し上げるべきであるが，紙面の都合により機関名にとどめることでお許しをいただきたい。〕

引用文献

- 1) 渡邊 満 1999, 「コミュニケーション的行為理論による道徳教育の可能性」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻, 第1分冊, 96.
- 2) 渡邊 満 1999, 「同上論文」, 94.

参考文献

- Krippendorff, K. 1980, Content Analysis : An Introduction to Its Methodology. SAGE Publication, Inc. 三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳 1989 メッセージ分析の技法内容分析への招待 勁草書房.
- 全国国公立幼稚園長会事務局 1995.4~2000.3, 「論説」『幼稚園じほう』
- 文部省 1973.4~1999.3, 『初等教育資料』東洋館出版社.
- 文部省 1999, 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.
- 文部省 1998, 『新しい時代を拓く心を育てるために—次世代を育てる心を失う危機—』文部省大臣官房政策局.
- 文部省 1996, 『データにみる生徒指導<平成8年版>』第一法規出版.
- 文部省 1989, 『幼稚園教育指導書 増補版』フレーベル館.
- 八並光俊 2000, 「テキスト分析による生徒指導知の標準化に関する基礎的研究」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻, 第1分冊, 75-86.
- Jürgen, Habermas 1981, 河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論(上)(中)(下)』未来社 1985.
- 幼稚園教育大全作成委員会 1996, 『幼稚園教育大全』1~5巻, 全国国公立幼稚園長会.

The Changing of Paradigm and Practice on the Heart Growing Education in the Kindergarten.

Key words : the heart growing education, “SHOTOUKYOUIKUSIRYOU ”,
“YOUTIENJIHOU”, course of study for designated kindergarten, text analysis.

Yukitane TANAKA, Shigeo MIYAKE

This research examines the changing of paradigm and practice on the heart growing education in the kindergarten. Two kinds of texts about the early childhood education are analyzed.

One is the report in “YOUTIENJIHOU”.The other is “SHOTOUKYOUIKUSIRYOU”. The former deals with the trends of the kindergarten education in Japan. Studying these texts published from 1973 to 2000, we find the paradigm shift in the Japanese early childhood education. The latter carries the theme, the subject and the content of the curriculum research in the designated kindergarten. We make clear the practices on the heart growing education from these texts.

We find the four results as follows:

- (1)Contents of the articles are separated from the real life of children.
- (2)Lack of child-centered practices.
- (3)The problem of child-teacher's mutual relations.
- (4)The crisis of children and school.
- (5)The ambiguity of “heart growing education”.

As a conclusion, we must search for the education based on “the sprout of the morality” suitable for early childhood. In addition, we try to reconstruct the educational environment which is the base of the early childhood education.